

大斎原

熊野坐神社・・・大斎原についてからの安珍は、完全に精彩を欠いていた・・・。
南坊師匠から根回しをしていただいていた約束の商談さえ、うまく、まとめる事が出来ない・・・。

ただ、無駄に日々だけが過ぎていった・・・。

一人になると、安珍の中に、清姫の感触がよみがえってくる・・・。

それは、毎夜、安珍を狂おしく苛んでいた。

そんな・・・ある日の事だ・・・。

いつものように安珍は、大斎原から熊野川を街道沿いにある庵室や禰宜所をまわった・・・

・・・といつても、もう何日も、同じ事を繰り返しているばかりで、全く、先の見込みはない・・・安珍は、道端に座り込んで・・・あてもなく参詣者の人波を眺めていた。

熊野坐神の社殿は、熊野川の中州の中に立っている。

船も出ていて、渡し賃をわたすと乗せてくれるのだが・・・参詣者の多くは、川の中にぎぶぎぶと、足を入れて渡っていく。

この方が、神の加護があつくなると考えられている。

今、一人の男が、熊野川の流れに足を踏み入れようとしている・・・。

その足下がおぼつかない・・・。

どうやら、重い病にかかっているらしい・・・。

安珍は、立ち上がっている・・・自然と、男が川を渡るのを手助けする気になっている・・・。

安珍は、男に声をかけた・・・こちらをチラリと見た男の顔が崩れている・・・。

癩病だ・・・安珍は、一瞬、ひるみそうになった・・・。

しかし、瞬間、病人を看病する清姫の姿が頭に浮かんだ・・・安珍は、ひるみそうになった自分が恥ずかしくなった。

「手を貸しましょう・・・。」

安珍は、もう一度、声をかけた・・・。

男は、不思議そうな顔をして安珍を眺めている・・・。

「しかし、わしは・・・。」

言いかけるのを、安珍は制する・・・。

「ここは、流れの速い所もあれば、深みもある。あなたの足取りでは、危ない・・・。」

安珍は、半ば、強引に男の崩れた手を取り、川を渡った。